

カダヤシ(蚊絶やし・Mosquito Killer)



中池見湿原のメダカの群れ



「メダカが少なくなったというけれど、結構沢山いるよ」と子供たちがいうので行ってみるとカダヤシだったという話を良く聞きます。

私も、蝶の写真撮影などでメダカをよく見かけますが、昔に比べると「随分減ったなあ」と感じます。

このカダヤシはメダカによく似ています。大きさもカダヤシの方が少し大きいぐらいで、ちょっと見ただけではその区別はつきませんが、背びれや尻びれに特徴(下図で黒く塗りつぶした部分に注目してください)があるので、そのことを知っていれば見分けることは比較的容易です(ただし、上から見ただけでは分かりません)。カダヤシ(昔はタップミノーと呼ばれていました)がアメリカから日本にやってきたのは1916年(大正5年)のことです。

メダカとカダヤシは同じメダカ目ですが、生き物としての大きな違いは、メダカが卵を産んで子供を孵す卵生であるのに対して、カダヤシは卵生ではなく、稚魚を直接産む胎生の魚で、グッピーと同じく卵ではなく子供を生みます。これは現在の日本の環境では、繁殖の上でとても有利に働いています。

これらを表にまとめておきましょう。

名称	特徴	背びれ	尾びれ	尻びれ	初期発生
メダカ		後方	真すぐ	幅が広い	卵生
カダヤシ		やや後方	丸い	幅が狭い	胎生

近頃、田んぼの用水路でも全てコンクリートで囲われたような状態になっています。したがって、流れは速くなって、底が砂地でないから水草が生える余地がないという所が多くなりました。メダカは水草に卵を産みつけますが、

産み付ける水草がないので、卵を産むことができません。しかし、カダヤシは水草のない水路でも胎生のためドンドン増えることができます。

このカダヤシはアメリカの東南部、ミシシッピ川の中流から下流にかけて棲息しており、淡水ばかりでなく、川が海に注ぎ込むいわゆる汽水域でも生きられ、口が上向きに付いているので溶存酸素の少ない汚い水の中でも生きていくことができます。すなわち、水が濁っていても、塩分の多い埋め立て地の細い流れや、下水などの悪環

境のもとでも生きていくことができます。また、食性は食べられるものなら何でも食べ、場合によっては有機物を含むヘドロまで食べるといえます。このカダヤシが最近何故こんなに話題になっているのでしょうか？

話は古く、カダヤシが表舞台に出てくるのは1904年に着工されたパナマ運河の建設現場からです。当時の建設現場では蚊が媒介するマラリアの流行で、工事の中断がたびたび起こりました。これを救ったのが現場に持ち込まれたカダヤシだったというわけです。

工事現場一帯に放された彼らは、ボウフラを片っ端から平らげていき、これによりマラリアの発生は低く抑えられたといえます。その結果、運河は10年後に無事開通し、ボウフラ退治の能力を高く買われたカダヤシは世界各国から引っ張りだこになり、あちこちに移植されます。つまり、「Mosquito Killer」として多くの国に迎え入れられます。

日本の「カダヤシ」は文字通り「蚊絶やし」から来ています。日本に来てからは、ひっそり暮らしていたようですが、1960年代の終わり頃になって、カダヤシは一躍表舞台に引きずり出されることとなります。

世の中は高度成長のまっただ中、この頃から各地で水質汚染が進んで、頻りに蚊が大発生するようになります。そこで目をつけられたのが、ボウフラを好み、汚水浄化までやってくれるカダヤシだったわけです。殺虫剤による汚染を嫌った人たちはカダヤシを大歓迎しました。

以来、カダヤシは「生きた殺虫剤」として日本各地に派遣されることとなります。ところが、1970年代になると、カダヤシの運命に異変が起きます。日本人の郷愁を誘うメダカが、激減しつつあるということが次第に分かってきたからです。

「犯人はタガヤシである。メダカの餌を横取りし、時には攻撃さえ仕掛ける。けしからん」というのが彼らの罪状でした。ここで、高度成長期のヒーローは、無惨にも「害魚」の烙印を押されることになってしまいます。

新聞などの報道では、「外国から持ち込まれて野生化した生物によって、日本在来の生物が攻撃されたり、農作物が荒らされるなどの被害が深刻化しています。また、在来生物との交雑による生態系の乱れも懸念されています。こうした事態を重く見た環境省は、環境破壊を引き起こす恐れのある外来帰化生物の根絶を目的とした駆除に乗り出しました。」とあります。

人間の都合で人為的に入国させられ、不本意ながら帰化してしまった外来生物たちに助かる道はあるのでしょうか。駆除の背景には、公害問題への関心が高まって、人間達の自然保護熱を呼び覚ましたことが挙げられます。多くの人が「失われた自然を取り戻そう」「破壊された自然を取り戻そう」と叫び、「メダカがかわいそうだ」と大声で

叫びます。

日本の環境問題は何時も受け身の「・・・された自然・・・」で始まります。つまり、主語が不在なのです。はたして「カダヤシ現象」は誰によって引き起こされたのでしょうか。そもそも、カダヤシを日本につれてきたのはわれわれ日本人自身ではないのでしょうか。

メダカを駆逐した最大の功労者？は「人間」だというのに、人間のことは括弧に入れて、カダヤシに罪を押しつけるやり方は従来通りの日本のやり方です。沖縄や奄美大島のマングース、可児市から広がっていったアライグマなども同じですね。彼らの運命が気がかりです。

日本の環境問題は、何時も「人間を外した」あるいは「人間の行為を除いた」議論でしかありません。蝶の保護にしても全く同じことがいえます。カダヤシが日本にきてはや90年が過ぎました。帰化生物といえども生態系の一部です。人為的に作られた生態系であれ、その回復には動植物の多様性は不可欠です。これらの生物を排除することによって、落ち着きかけてきた生態系のバランスをまた崩すこととなります。

科学者というのは、何もかもが分かっている人ではなく、「現在何が分かっている、何が分かっているか」が最も分かっている人達のことを指します。「すなわち何が分かっているか正直に話す」のが科学者の責任なのです。

環境省は果たして長期の展望に立って事を運んでいるのでしょうか？動物や植物が大切なのは、その利用価値が高いからだけではありません。自然との相互依存をおろそかにして、生態系を乱暴に扱えば、人間の生そのものが危うくなるのです。もつと我々の次の世代のことも考えに入れた、スパンの長い生態系保全活動をすべきではないでしょうか。

地球上の生物達は「人間さえいなければ、我々はうまくやっていけるのになあ」と嘆いているのは間違いありません。

帰化生物が問題になっているのは日本だけではないようです。世界全体で同時に進行している現象です。その行き着く先は生物の均質化です。これは経済や文化面で進行しているグローバル化と根が同じのようです。世界中の街並や人々の服装が似たものになり、少数民族の文化が消滅の危機にあるのと同じように、市街地、路傍、農耕地などで見られる生物は気候が同じならば世界中どこにいても同じ種類構成になってしまうのでしょうか。